

龍  
法  
每  
句  
數  
百  
多

下

911.3

八

下

秋之部標目

七月

立秋 初

一葉

二 敬柳

七夕

初嵐

輜

絲瓜

木槎

桔梗

柿もき

百日紅

秋露

魂糸 四丁

墓糸 五丁

つと入 三丁

盆月 五丁

燗籠

むし 六丁

きり 七丁

焙吟

踊

お撲

稲妻 八丁

毛粉

黍

花火

をり 十丁

葛葉

茅草

好く屋

三秋 十一丁

葦

雛以花 十二丁

西風

八月

八朔 十三丁

三日月

稻

ひらひら

...





栗

廷字

外字

秋籬

紅葉 世三

子以粘 世三

十二叔

秋之 世四

秋葉

夜字

未枯 世三

秋

木滅

菜黃

秋夕 世六

也秋 世

九月 世八

木咏多十 秋山 古松 秋色十 秋水十

芋 葛 芍药 野 叶表

秋百 唐李字十 秋风十 野十

小翎引 放生会 初秋 行方 月十

十六板北 存 秋日北 秋分 素山子

唱子北 流水北 麻 雁北 鹤铃

砧北 吹笛北 籍 隔燕 芦穗

秋浮北 九月 色之松 秋绵 秋酒

秋板 芭蕉 露水 茸特北 村

菊 色之松 秋绵 秋酒

栗 迺字 外市 秋雄 红果北

三八钻北 十二板 秋柔 夜字

未枯北 秋秋 木槭 菜萸 秋夕北

西秋北 九月北



發句類聚

秋部

七月

青顧慮了輔  
八尋園寛松  
編輯  
刪定

之秋

秋風此心うこぬ 雁さく 控  
二二尺きり秋えくくをこれい  
菖蒲けの一は雨ハ けさの秋  
秋きぬと月よさくく 稲のむし  
陵り笄みたらつやけさの秋  
驚け秋えさくく 何ふくか  
秋まやふの畢竟と おもたれけ  
けさの秋まやふの畢竟と 燕いけり

嵐雪  
類太  
六窓  
故班象

柎絮

長梧

蘭室

完来



秋まらや井いささかの波し此 吐月  
 蚊の足も大事に踏むやはさの秋 大江丸  
 何もたつやいそにきれる鳴乃雲 登之  
 ひまのや月毛の弱きふの秋 月巢  
 ちりぬの至んてあふりるの娘 巴明  
 翔白の海子秋のきりりち 木羽  
 皇たうくむ波すしーいそあ秋 百鏡  
 え弦の大しと切きしりけさの秋 芦洲  
 秋まらやあふり入てし人のりよ 魚文  
 蝉の羽りきりーるしけさの秋 一扇  
 芙蓉の色はしりしちりさの向き 提國

おと菜

散柳

羊のくちぬおもつしけりるの秋 楚水  
 秋まら森さうのうかよ田方達 寥松  
 あぢ不のまふ中さう一葉あ形 蓼太  
 新とんー井し湯籠よ一葉小 吐月  
 厚て後風さいくと相い葉 午心  
 何うつまけ雷をれさう一葉あ形 李文  
 いそりや極ひさしーてちり柳 蓼太  
 一月よりしてそあうち柳の家 吐月  
 ちり柳西の大寺ふ日を入ぬ 六窓  
 七夕を降すとおあうちあ世し 嵐雪  
 ちり合ひやそしーそあうちあ世し 沙羅

七夕







木槿

枝折き大塚遊のこやし木槿小  
むしむれ見し七つあり甘木槿

周竹 普成

層々よ大塚層のく木槿小

蒲丈

朝ハ日の何くもあやも木槿

熊巢

古しき木槿のあらゆるあは

蓼太

宗任子之元ひの同ん木槿も

吐月

夕ひのり木槿のこころ木槿も

雪萬

くしひのり木槿のきけあや

故班象

生らんれをよめふもあは秋のこ

蓼太

事をもあはれ木槿もあはれ木槿

完未

見あはれと人ともけこ木槿も

五舟

木槿

枝折き大塚遊のこやし木槿小  
むしむれ見し七つあり甘木槿

周竹 普成

層々よ大塚層のく木槿小

蒲丈

朝ハ日の何くもあやも木槿

熊巢

古しき木槿のあらゆるあは

蓼太

宗任子之元ひの同ん木槿も

吐月

夕ひのり木槿のこころ木槿も

雪萬

くしひのり木槿のきけあや

故班象

生らんれをよめふもあは秋のこ

蓼太

事をもあはれ木槿もあはれ木槿

完未

見あはれと人ともけこ木槿も

五舟

秋槿

百日紅

白かハ只ふあうて何あの槿

隻二

夕暮のあはれくもて秋あてふ

正月美

秋のてつこつはあはれもあは

午心

あはれ木槿もあはれもあはれも

秋左

秋のてつこつはあはれもあは

曉長

道ききやまはれもあはれもあは

窈松

約清ふ甲の何くもあはれもあは

盟鴉

魂棚の雲あはれもあはれもあは

嵐雪

とくし大に見れ何りり魂系

六窓

淋さあはれもあはれもあはれも

岷山

魂系

夜よ入るとはれ新あはれ魂系

吐月



梅東此はよふはかしくもやうな  
 魂柳や雪懐ききし細くもの  
 ともかかぬお森や世や魂 糸糸  
 了把すつうと後をたまたまむく  
 古河 普記  
 魂柳やそつあつめてもその糸  
 大江丸  
 似舞のけいせいのきつと魂 糸糸  
 夜鬼  
 け急をいねよとつと白意糸  
 氷花  
 魂柳や雪懐ききしと 糸糸 糸糸  
 嵐雪  
 月々清く人の影し魂まじり  
 蓼太  
 魂柳や大工の柳山竹 二本  
 甘カミ 麥由  
 いささこれと糸あつと魂まつり  
 晋成

魂柳や雪懐ききし月の清く  
 班象  
 雪懐き世の道里しつと此乃る  
 翠松  
 柳舞や隣は雪をけり  
 野乙  
 ひらつとさやとつり 逆 浄  
 外古  
 送る出に林さしけきあつり  
 梧泉  
 送る出に林さしけきあつり  
 三千歳  
 追出た葉吹雪をたふす  
 完来  
 盆月  
 盆月乃母にあふねや糸の 月  
 蓼太  
 盆月乃母にあふねや糸の 月  
 大江丸  
 盆月乃母にあふねや糸の 月  
 尾張 曉堂  
 盆月乃母にあふねや糸の 月  
 蓼太

盆月

蓼太



燈籠

君、為細も、浦や盆乃月	班象
誰あはれ、松河もれく盆の月	山市
くおせし、青ハ、空何も盆の月	吐月
人の飛や、後、掃く門や盆の月	寒松
新も、古も、尺も、くおお盆の月	鬼秀
誰、記人盆に、尺、定人盆の月	月巢
盆の月、貝に、く書法、く那	郷音美
古、く、ハ、思、く、盆、月、や、盆、盆、盆	山幸
盆、盆、盆、盆、盆、盆、盆、盆、盆、盆	嵐雪
白、骨、け、切、籠、燈、籠、籠、籠、籠、籠	完来
燈、籠、籠、籠、籠、籠、籠、籠、籠、籠	歌白

む

燈籠也、二十日、盆、盆、盆、盆、盆	沙夜
と、と、と、と、と、と、と、と、と、と	白麻
都、より、盆、盆、盆、盆、盆、盆、盆、盆	一葉
盆、盆、盆、盆、盆、盆、盆、盆、盆、盆	子雲
盆、盆、盆、盆、盆、盆、盆、盆、盆、盆	連大
盆、盆、盆、盆、盆、盆、盆、盆、盆、盆	麦、盆
盆、盆、盆、盆、盆、盆、盆、盆、盆、盆	水、盆
盆、盆、盆、盆、盆、盆、盆、盆、盆、盆	葉、大
盆、盆、盆、盆、盆、盆、盆、盆、盆、盆	吐、日
盆、盆、盆、盆、盆、盆、盆、盆、盆、盆	年、ん
盆、盆、盆、盆、盆、盆、盆、盆、盆、盆	大、ん



君の細き浦や盃の月  
酒あつて杯の月を盃の月  
くお世の青い空何を盃の月  
人の影を後掲ぐ門や盃の月  
影を盃の月くおお世の盃の月  
誰に心をくく人盃の月  
盃の月盃の月盃の月  
盃の月盃の月盃の月  
盃の月盃の月盃の月  
盃の月盃の月盃の月  
盃の月盃の月盃の月

班象  
山市  
吐月  
寥松  
鬼秀  
月巢  
郷言美  
山幸  
嵐雪  
完来  
歌白

燈籠

燈籠也二十日の月  
とくろくや消るも人の如  
都より暖かおはまき燈籠  
甚あつと家もき新の燈籠  
おくと秋の月をくく  
燈籠や月お光りお思ひ  
灯籠のつらあきお上り  
燈籠や多をくくたつた  
盃の月盃の月盃の月  
盃の月盃の月盃の月  
盃の月盃の月盃の月  
盃の月盃の月盃の月

沙夜  
白麻  
一涼  
子樂  
連太  
妻の  
水衣  
葉大  
吐日  
年ん  
大に丸

む



在芳少了却の中をまゝくた  
 ねう枝うかけてぬつや花の中  
 曉の地をまゝくたぬかしの  
 むしやや今年もよりふりも  
 眸にまゆぬかむしやの  
 うりくとも雪深や金のも  
 入ると只いふあやむしや  
 美ふあやまふあやむしや  
 むしやに又ふむしやもあやむしや  
 虫のあやむしやもあやむしや  
 ねむしや火をまきむしや  
 西

班象  
 菅雅  
 音橘  
 吐月  
 指月  
 故班象  
 十曉  
 寒松  
 高家山  
 春我  
 普成

まじりくす

味

花火や燈河くまありくす  
 冬草をばまふあやむしや  
 啼きあやむしやのあやむしや  
 ことと吃りてむしやあやむしや  
 曉のあやむしやあやむしや  
 まふあやむしやあやむしや  
 まじりくすあやむしやあやむしや  
 橋埜池のあやむしやあやむしや  
 うりくともあやむしやあやむしや  
 深くあやむしやあやむしや  
 せんあやむしやあやむしや

寒松  
 東  
 兼平  
 六  
 兼  
 吐月  
 正急  
 人左  
 兼太  
 兼  
 吐月

情 吟



踊

せんほしやわしれはる風のそ  
 林風に人多くあらし 踊ハ  
 子を持つて女をいふおかし  
 踊ハぬまの月夜半ハ子ハ  
 踏ハの中を合の通る浮世ハ那加  
 後子ぬ子に海河の益 踊  
 踊ハのよまよふ人々ぬ踊ハ可ハ  
 都々々人様又ておかしハ  
 角力なるあつぬや秋のうハやハ或  
 初ハ人多くあつぬやハ可ハいハとハ  
 大内少御をいふやけや角力ハ  
 秋色  
 方壺  
 千雀  
 吐月  
 連大  
 六窓  
 共道  
 白麻  
 大江丸  
 梧泉  
 冬翠

相撲

是きりとおひつるも何ん角力ハ  
 果ハ代の米をあらぬ角力ハ  
 定捨ふ母あつぬ角力ハ  
 狗阿をぬちぬ人やお撲ハを  
 扱ハして大ききぬ角力ハ  
 十八とまけハおハや角力ハ  
 勢ハ子ハとハぬ角力ハ  
 皆角力ぬあつぬ角力ハ  
 有角力食す日ハ十倍ハ  
 三十ふハ角力ハ  
 角力ハを問はる角力ハ  
 秋色  
 方壺  
 千雀  
 吐月  
 連大  
 六窓  
 共道  
 白麻  
 大江丸  
 梧泉  
 冬翠



箱妻

負す一箱角力を疾風のこころは  
箱妻やあをぬくも 龍波山  
いまつもや枯れぬるものこころを  
箱妻や伊吹あけきおの湖  
箱つもや 龍あき村のや  
いまつもや 枕のいゆふ念の端  
城の園に箱妻あけふ新堀川  
釣人乃いまつもや 常の糸  
箱妻もやあけきおの湖  
川 雲にわらう上は月あや  
箱妻もやあけきおの湖

蕉村  
吏登  
蓼太  
完来  
三上  
赤鶴  
故班象  
長梧  
儿董  
班象  
理牛

舟務

船きりやあけきおの湖  
雲は月あけきおの湖  
山きりや 藤子深く松の明  
船きりやあけきおの湖  
船きりやあけきおの湖  
何れも船きりやあけきおの湖  
船きりやあけきおの湖  
雲は月あけきおの湖  
船きりやあけきおの湖  
雲は月あけきおの湖

儿董  
完来  
翠松  
鶴里  
翠羽  
寺橋  
可風  
嵐雪  
蓼太  
白麻  
石髪

舟務



あはんとは芳く柳の一枝りか スルカ 梧泉  
まふあてまけしきま城小松原 普成

あしはあまを清くも雪をさし 洛 吐月

白あやまをさしはまをさすの上 蝶夢

赤あやまをさすはまをさすの上 氷花

伐し中下枝の山何くあはれ秋 寒松

障ふは中下枝の山何くあはれ秋 三千彦

春きくあはれあはれあはれあはれ 蓼太

園きくあはれあはれあはれあはれ 深松

あはれあはれあはれあはれあはれ 不真

花大

老の秋 嵐花大 中 進 生 々 々 寥松

さもあはれあはれあはれあはれあはれ 菅雅

あはれあはれあはれあはれあはれあはれ 蓼太

あはれあはれあはれあはれあはれあはれ 菅雅

あはれあはれあはれあはれあはれあはれ 吐月

あはれあはれあはれあはれあはれあはれ 班象

あはれあはれあはれあはれあはれあはれ 嵐亭

あはれあはれあはれあはれあはれあはれ 至兆

あはれあはれあはれあはれあはれあはれ 大江丸

あはれあはれあはれあはれあはれあはれ 稲束

あはれあはれあはれあはれあはれあはれ スルカ 龜流

女郎花

蘭



蘭

草花

雨止りて虫の喰おるをくばり  
をくばり淋きちにおぼし

せらふを林に結さすもさうにま  
こぼさぬも又名を其をさす

降ふあきぢる人あはれを其の世  
其葉の香や入村まをさす

其葉の香や入村まをさす  
其葉の香やおぬ心をさす

四阿の香何ふ其葉の白いさ  
其葉の香や入村まをさす

日乃わいさす御あり子のちか

夢松

翠兒

柙沢

升古

蓼太

乳峰

雪武

得魚

千慮

故班象  
来之

瓢

萩

牛をひく杖短し草花を

くくくとおくおの何さくは  
淋しきお後ゆきくは杖瓢

葉もつてもふくくは杖をさす  
おあつくおはつんえぬあつくは

る生を育てく蔓のつるれは  
蔓のつる大隣ふくく瓢

神のこ林深井を吐てあつひり  
多きを捧ぎあつあをさす

こころをば託せりりねのそ萩  
萩の戸や月のま居のつまをり

松欣

蓼太

月巢

月巢

巴蓼

吐月

富川

完来

雅堂

如水  
吐船



廿四

素雄 月巢  
 一筆坊 素雄  
 寥松 素雄  
 満良 素雄  
 杏庵 素雄  
 蒼虬 素雄  
 蓼太 素雄  
 魚没 素雄  
 夜兎 素雄  
 古調 素雄

完来 素雄  
 月古 素雄  
 春橋 素雄  
 秋白 素雄  
 月巢 素雄  
 吐月 素雄  
 雪我 素雄  
 露秋 素雄  
 希因 素雄  
 百里 素雄  
 連文 素雄











口上のうちもろはる西風之南

風宿

八月

八朔

ハきこ扇きしたる小百姓

蓼太

ハ朔也池田伊丹此日結酒

完来

ハちこやまをよまへぬ梅のさ

倉鼠

こり月也さられたるる海峯系

寥松

夕風也落も勅に稲むしる

蓼太

稲

三日月

干稲也鶯鈴たしるるは原

歌白

又も人り傑をそあられいねの世

吐月

うけ稲也人り得耳もむしる

雪珊

破干稲もちかけし時ちり

玉宇



伯瑩

右たり福の中川より

寥多松

さ波の地もあるさ

乙児

おつすも福刈着

吐月

淋しきを新らる

菅雅

大井川と志して

投血

乃ほこのあひ結

普成

ををぬきもも

隣江

ををり沖より

喜曉

おをり風き

寥松

十餘りも

兀子

山の傍り

青雨

花野

木啄鳥

秋山

掠奪

木つきの夕日

木啄鳥や新き

羊蹄をを

秋の山を

弦あれ

秋の山を

西ふく

遊割

いと

眸

枯梗

青雨

吐月

千林

寥松

鷺白

弄甄

嵐雪

蓼太

吐月

宜麥

卜水



新蕎麦

梅乃冬くぬ田より。花井川  
果冬とふふき風と花井系  
岸のふ日あかやきとど井  
折つても足やう積あふそ井の形  
あふふ井川流るるふふ井  
ふふふふふふふふふふふふ  
つうくくくくくくくくくく  
井井井井井井井井井井井井  
あふふふふふふふふふふ  
はふふふ日井井井井井井  
何んか井井井井井井井井

文足  
月巢  
寥松  
人克  
柳美  
節白  
蓼太  
吐月  
班象  
完来

秋水

新蕎麦は八月十五日  
骨折て物に沈く秋の水  
刺刀にあててまき返しつきたる  
五ふ尺岩のころまよ井の水  
泳を御沖中川や何ふのふ  
積の溜りかけさう井の水  
矢を自ふてまき流る井の水  
白を自ふてまき流る井の水  
手繰流のくくくくくく

文足  
雷堂  
芳里  
三鶴  
魚紋  
梅堂  
五桂  
寥松  
百里

芋



葛

うみせく淋しきも此心少

蓼太

弱牽

弱牽也日やけて甲斐の黒男

蓼太

鷓鴣

我袖もひきつゝろひぬ弱牽  
終つ時也板井系れ行日系

三思  
仙菓

竹春

彼春何う時あり梅も休の春

葛史

秋雨

秋の心よの町にハ降るの雨  
伝ふきて経つ本や株の雨

蓼太  
方壺

秋もやそめ建也ー子ハ葛

蓼太

蕃椒

まゆふよりよの夕や秋の雨  
秋もやそめ人晴しゆの山  
あきの心もそめくハ秋の雨

魚舟  
素迪

似蝶此葉をわすれ一屋し  
皆深てきりーあつて屋女子

女十員

はくそめお顔せしれ一屋し  
一畠人おそめーやたつこのし

太江丸  
六窓

こつやねえひつ屋すや蕃椒

全

うつ

秋もく下むせして也晴り

蓼太

秋もれ着ちやるるうつ

敬我

吐も秋ハせハきくらの部

吐月



秋風

くさけのそよぬきも 勢ハ  
晴うつ橋本をき 船路く家  
吹く人待つまゝおぼも 勢ハ

祇卜  
白酔  
乙児

秋の風は 舞踏の庭からり

更登

あき風やあけ 湖舟にま帆行帆

吐月

芥川又秋風をこゝろ 桂原ハ

馬勃

秋風やねも 葛のふこむも

出求  
投茶

晴れは 浪まよも 河れ 秋の風

心祇

猪垣よま 榎振るあま 秋風

寥松

人もよま 雲の 薄き 秋の風

楚岸

甲子くも 秋をこゝろ 藤也 秋の風

蓼阿

弦おて 帆のりりりま 秋の風

完来

秋風やねも 葛のふこむも

午吹

秋風や日小 向り 砂川を

素迪

みよ 秋も 葛のふこむも 秋の風

梅人

あま風を 一筋き した 機り 糸

虚舟

あき風や 柱も ころろ 走り 糸

深松

あき風や 糸も ころろ 糸 秋の風

故流

色 河は 浅き 糸も 秋の風

馬耳

秋風の 勢も 吹き 遠く 雲

雁赤

あき風 乃 遠く 飛く 糸

料石



桃祖  
 雪貫  
 螢布  
 普成  
 老阿  
 天府  
 蓼太  
 不鷹  
 柳絮  
 人

晴

風

小鰯引

放生會

針賣

初波

大江丸  
 吐月  
 秋兔  
 由岐年  
 宜交  
 寒松  
 玉色  
 至兆  
 菅雅  
 月巢



侍霄

まの香やあつたを思へし  
侍香やあつたを思へし  
まの香やあつたを思へし  
侍香やあつたを思へし  
まの香やあつたを思へし  
侍香やあつたを思へし  
まの香やあつたを思へし  
侍香やあつたを思へし  
まの香やあつたを思へし  
侍香やあつたを思へし

藝太  
故班象  
阿人  
吐月  
午心  
麥雨  
嵐雪  
全  
史登

月

明月やまの香やあつたを思へし  
明月やまの香やあつたを思へし  
明月やまの香やあつたを思へし  
明月やまの香やあつたを思へし  
明月やまの香やあつたを思へし  
明月やまの香やあつたを思へし  
明月やまの香やあつたを思へし  
明月やまの香やあつたを思へし  
明月やまの香やあつたを思へし  
明月やまの香やあつたを思へし

全  
藝太  
宜交  
沙羅  
深松  
歌白  
普成  
月巢  
六窓  
方壺  
文足



明月や西の代くもあま  
明月や仲子米搗水路舟  
明月や今宵盛るゝおは  
明月や十の月清の舟  
明月や橋をたぐすも秋の  
明月や晴るの後にまよふ  
明月や明きまの東ま  
明月や大船をまの流の  
明月や園のまの枝の青  
明月や也かまふのまの  
明月や燈を照らす風かつり

婆城  
月景  
吐月  
魚紋  
宜麥  
午心  
班象  
普成  
紙川  
蒼狐  
蓼太

中秋や日安くも了月お  
明月やいつれに人の喜  
明月や老子孫まの城の  
明月や老のまのぬけを  
いさ碎るまの四つはん  
いさ此月人乃西を  
いさ子後世より月  
いさ笑のまのまの月  
いさ隈あふれ秋の辨こ

文太  
魚紋  
蓼太  
嘉好  
月守  
寥松  
吐月  
大江丸  
司丸



相心秋のあつた八月よまゝの夜も  
ひびきいたに風も静かたれ秋の月  
内大名あまの月尺ふも人言羽籠  
あまの月尺ふも人言羽籠  
一輪の月に川らんをり夕  
とて世は休まるはうりふれ月  
玉ももむ貝も今宵や月の秋  
月の若くはれた少秋の夜もあ  
都 古き夜にまきれ秋の月  
而れ月もさる絶て却ねは  
世のまをさるる月もさるる

寥松 馬耳 月巢 吐月 青橘 文母 未光 沙羅 蚊牛 管雅 楚岸

山崎のうり秋ハ文科科の月ねは

完末

十の夜

いさむりぬ園のうりあまの夜もあ  
十の夜やまのふれ夜をさるる方  
十の夜やまのふれ夜をさるる方  
いさむりぬ園のうりあまの夜もあ  
西川一二里は休まるやまの夜も  
岷谷中の淋さるる夜もあ  
いさむりぬ園のうりあまの夜もあ  
すまの夜もあまの夜もあ  
あまの夜もあまの夜もあ

白騎 蓼太 吐月 金鷲 班象 嵐雪 全 吏登 青牛 馬光

為



あじしり弓法のまやるる原  
四阿も穂千あもれく古層  
いつちれきんを起るるゆ  
ももちてひもをるるのり  
そは候ふ日も樹き層のま  
穂千も今以忘るるむねの時  
層くおのりくも林層の  
おのれくもまきりすも  
耳ももちハたもまきりすも  
挿入く風志つめくも  
芒神の心もあれん風もるるま

長梧

吐月

寥松

魚波

柑翠

素夕

蓮佐

大江丸

葆光

春鳥

名雄播

秋日

松風の屋戸根よ何も芒一の角  
花ももき聖の衣を吹のまを  
時のお言乃打たも解るる花層  
あはれりくももくも芒くも  
秋のりやもあはれくも民の業  
あまれりや楊をわくもえ白くも  
秋のりやもあはれくもあはれりくも  
秋のりや人あはれくもあはれくも  
二階くも山も秋の夕りくも  
あはれりくもあはれりくも秋の夕  
今を解くも吹くもあはれりくも

蓼太

蒼虬

故六

牛晡

午心

千林

寥松

故六

玉桂

艸阜

蓼太

野分



山業山子

明鳥斤羽よりしる世分あ奈  
而折く世分を渡して降板  
吹おて遊の本傳ふ世分  
今歌見れは奈の伏家の世分  
大佛をとりておくる世分  
人々地つて世分の隣り  
おれ奈の色を世分の世分  
芝草の實に吹あふ世分  
人々よやまのまかり  
芝草のあはれ世分の世分  
今おれし世分の世分

月守  
文牛  
白麻  
吐月  
蝶羅  
故班象  
文宗  
木芝  
蓼太  
夜兔  
六窓

おれし乃橋をなまかり  
百姓よりハマりて山業山子  
古傳いきりおきてかきあや  
夕暮のあはれ人限るおれ  
不細工此いしく淋し  
園雨とぬる中よき山業山子  
清く奈を蒸氣してあま  
か茂川のあはれをよかり  
ふれ星をほるる朝あま  
十日やと立てたれ山業山子  
新風のあはれしぬるか

えま  
午人  
暮山  
其由  
板茂  
月業  
吐月  
風宜  
采汁  
櫛友  
画障



写子

おをこめて送らさるまじか  
をのう田ハ書てまらう田さ  
撫ぬけの手いふたは  
川河けて松の月ねや  
おまのまに侍るま  
五十あう上子ある  
索交ふふ敷友と何ん  
曳てやふふま何り  
而折くねまの写子  
写子川くまに  
おまのまに侍るま

雪の  
吐月  
東を  
葉を  
毒外  
吐月  
年人  
梅仙  
雪を  
聖口  
吐月

添水

鹿

杉の枝を切りと添水  
添ふふれ控まて水の  
川板添ふう園ふ服の  
彌きく敷布ふあ  
くねおのふあ持  
若きけを  
麻笥を却の人に侍  
おや合を  
鹿笥れ  
あちう  
吹く

桑左  
吐月  
沙阿  
夷  
桑左  
金井  
園竹  
言  
月巢  
射集



麻  
六

松山やまよ中より麻の音  
 和らみよ木をけり麻乃甚  
 戸をさし遠山をせん麻の声  
 若の音うしろ志く月乃あ  
 小男若や何つねて写夕日山  
 鳴る川東て息き一唐此亭  
 清射人のまき一麻子笛  
 麻乃若や月乃櫛七消人と守  
 啼よる麻の身をうつ木根は  
 急せし八木の響きん麻は角  
 蓼太 簀丈 郎娥 峩月 歌白 月巢 洗水 完来 石髪 寥松 吐月

鷹

幾一きにやとめて入ぬ麻の山  
 若は若や京一里と只のまは  
 風林ぬ若ふくはまよ乃麻  
 小麻まき若は雲焚く嬉し  
 いつの空に若て降るす小田乃  
 二羽くとかきく幾一乃心より  
 一をうらひは田乃く思ひ乃ま  
 をくれてや月乃中り一羽  
 遠山を今もかき一乃小田乃厚  
 小田乃厚画と免ちやるは一  
 蓼太 吏登 青橘 星衣 吐月 蓼化







衣うの隈逸侍り女の那  
風ありいおとろきやまき碇  
かゝりとも取てあしぬ小松碇  
里人の温泉上東て後や小松碇  
黒髪友は影くあゆみきぬこ小  
啄つきの里とありたふ碇うか  
んこくくらん月のかく衣  
母乃碇をたひふぬく空れり  
近きより赤碇りり小松碇  
老里共都玉耳了碇うか  
是よりしと年波よせ碇うか

完素  
子交  
夜鬼  
午心  
文足  
不鷹  
寥松  
蚊牛  
其由  
蓼太

松子月尾上り碇や之りり  
掃やむハ碇うかといさおらん  
たやまされ月ちをせき小松碇  
右りりて碇のよ名尺るねうか  
うち何けく浅月五世名小  
そせ京乃木のかりり小松碇  
そり小本をよる碇うか近小松碇  
あまに位む桑のまや小松碇  
家お此森是の里んさよ碇  
さしね乃ほこせん長土碇  
しきや碇うかりてあひり

虚舟  
文足  
露澄  
不騫  
達琴  
歌白  
木丈  
普成  
月巢  
吐月  
管雅



烏瓜

一發也六本也一月日某

方壺吐月

一葉也六本也一月日某

攀太

一葉也六本也一月日某

郎娥

一葉也六本也一月日某

寥松

鱸

一葉也六本也一月日某

全来

歸燕

一葉也六本也一月日某

全

芦穗

一葉也六本也一月日某

班象

秋坪

秋の坪也の云は難う言ふ

午心

九月

秋在

秋の在也我云ふは難う言ふ

風竹

七夜

七夜也我云ふは難う言ふ

一響

秋風

秋の風也我云ふは難う言ふ

班象

秋葉

秋の葉也我云ふは難う言ふ

班象

松

松也我云ふは難う言ふ

松



新綿

新酒

菊

色之ぬ松もさききふらぬ松  
 目を友かしく色之は峰の松  
 里ハ今強あつてしき日如小  
 まいとの指ぬをきけりあ孫五  
 水もく新酒ハ人乃孫やまき  
 凝る心新酒の泡子ちるたれ花  
 六く酒園まきくハくまぬあり  
 美く果去きくき外の冬きく此  
 菊好や八日ハ菊て推しハ秋  
 ふきくや手打人ハと果人乃落  
 葉くて果ハ冬くや果の花

桃鏡

松吹

蓼太

吐月

嵐雪

寥々松

了浦

嵐雪

吏登

天府

蓼太

青牛

月守

人左

方壺

雪珊

阿人

沙羅

一兆

一鷺

月巢

了浦

色之ぬ松もさききふらぬ松  
 目を友かしく色之は峰の松  
 里ハ今強あつてしき日如小  
 まいとの指ぬをきけりあ孫五  
 水もく新酒ハ人乃孫やまき  
 凝る心新酒の泡子ちるたれ花  
 六く酒園まきくハくまぬあり  
 美く果去きくき外の冬きく此  
 菊好や八日ハ菊て推しハ秋  
 ふきくや手打人ハと果人乃落  
 葉くて果ハ冬くや果の花







きく候や客り候の星よは強

踏雪

芭蕉

淡くもよまよとくもくもを城下  
あやしくもあはきまもくもを  
あやしくもあけり裂くも芭蕉の形  
たや城まよ世を人破きを風の香  
出山の衣に似きり破きを城  
候よ房りてい又を世城の家  
昔くくもまよもぬ破きを城  
帆のうらぬもれりまよもあ  
まよまよもあはけりまよもあ

浴水

蓼太 蝶夢 文足 草石 午心 普成 三思 蓼太 青播

柿

月のかい見れ長閑とあふ  
あふ水は是れ木七かふきぬ  
吹折るの木を投擲せぬ  
昔かき七黒い衣八序門路  
もまよ柿の泣くもれり小松原  
昔くくもあはけりまよもあ  
たけりもあはけりまよもあ  
昔かき七人の泣り人あはけり  
柿あはけりまよもあはけり  
あはけりまよもあはけり  
あはけりまよもあはけり

柿

月巢 秋杵 吏登 美玉 女須美 銀俣 吐月 夜鬼 嵐雪 吏登



栗

迂宮

井市

秋離

この葉の時々々々柿は木末小  
流柿よりよもろなり鳥あか  
いらくりやまにまけるはの場  
作麼生と燒栗もまゝ小春川  
人志々々あふれけり栗は結  
るるりや子供つゞる流る客  
迂宮や作く井代の雪をけし

松風やうと強きりり井の市

夕は秋よ暮るまゝし后の聲

蓼太  
二柳  
嵐雪  
月守  
午心

月窓  
沙羅

雪漁

午心

紅葉

花一枝折ありりり秋の聲  
人あり此ゆりちあもみちり  
山々々々るるりりてむる紅葉  
やもろ木乃柿をささむる紅葉  
か入たる色はるあまもろりり  
いつたられあき山々流る初るあ  
葉出りて海うらうらうりりり  
一山のあ流るりりりりりりり  
りりりりりりりりりりりり  
人の舟も六洞ももももももも  
ささる根ももももももももも

雪守  
蓼太  
花調  
子真  
沙羅  
山幸  
春蟻  
普成  
故流  
得魚  
歌白



遊童よ道枝ふるきのみち  
妻木つと里人ちきもちふ  
洛外ハいつしれるおの  
お島いふもさるれを  
とみちやじりめだにふ  
ゆとみちをよきみの道  
ろ敷て月の歌ももち  
寺門さる人さるえい  
砂ちち備ちちちちち  
夕をみち照せけふく  
細るち敷ていもちち

一 派香  
白麻  
婆心  
深松  
富屋  
山幸  
完来  
軍麦  
繁松  
意長  
ト水

さい結

揚河つとあふ川や夕  
風むよ隣子さりち  
ちちの時取葉の中  
かきよちち透通も  
河の土よ照せむち  
おきよち結さひり  
かいさち時ち結の  
結はちち流して  
あ結ち目ふくあ  
川くち水ち月ち

吐月  
午心  
枝虫  
夜鬼  
大江丸  
沙羅  
嵐雪  
天府  
山松  
子代女  
葉太

十三板



待きぬし月の光し十之根  
かゝぬくも水やこほきん底の月  
くほくもくもくも秋や後の月  
底の月子を夕夕と露れり  
窓をぬくもほくも月を根の  
むくもきか江の目きく後の月  
空の底のせきかたの後の月  
持てぬくも窓をぬくも後の月  
下戸へ束の扇の風や底の月  
幅つぬ心よお何のちの月  
川走も危きなき十之根

月巢 吐月 完来 普成 卓花 沙野 寒松 夷門 花明 蓼太

柚味噌

おもしろく横影をくもる月の  
裾かけて里のちのちの月

普成

お何しやおの柚味噌も柚より  
柿の心持し柚みり那

今

柚みりや淋しき女よ

歌女

秋霜

秋葉や落の中よりしるか

寒松

つくくとおをり人や秋の露

北阜

夜寒

四十の酒のちのちのちの

蓼太

細布に里のちのちのちの

人左

おまふく園に徒身つておまふ

萬鈴

おまふく又るおまふのちのち

普成



木かひまよはす大の松をく  
洞樋を尾乃くく新松をく  
湫のぬま松火けくく松をく  
り煥く蝶の孫にまゝ松をく  
柳をくく松をくく松をく  
疾く神くく松をくく松をく  
漫月にまゝ大松をくく松をく  
大松の風を味くく松をく  
る漏る尾松をくく松をく  
松をくく松をくく松をく  
く松をくく松をくく松をく

蓼太  
完来  
亀二  
吐月  
三駱  
夷門  
時中  
五明  
寥松  
五拍  
普成

赤松

赤松や月桂あはれくく日のほろ

蓼太

妹

う松や春のくくほあくくほ

吐月

妹

赤松や月桂あはれくく日のほろ

赤心

妹

くくうれや松をくく松をく

京花

妹

赤松や月桂あはれくく日のほろ

木奴

妹

赤松や月桂あはれくく日のほろ

燕村

妹

くく松や鳥をくく松の皮

珠月

妹

赤の松をくく松をくく松をく

更登

妹

赤の松をくく松をくく松をく

班象

妹

赤の松をくく松をくく松をく

春蟻

妹

赤の松をくく松をくく松をく

秋鬼

妹

赤の松をくく松をくく松をく

秋鬼

新秋



つと入

木賊

菜黄

秋夕

志くぞは花をくしてや秋の富士  
 木賊く通うは是れ秋の夕  
 秋まじく好もおをふはたぬを  
 賣人くをて尺せり酒  
 片と入るを子後くきれり  
 つよりのおを人よ何の松をぬけ  
 秋もを白くふくまきとくは  
 山守の菜黄を清く鳥くか  
 玉出てりり甘りやあまのくん  
 障りまきの初も尺をき秋の夕  
 伊連  
 夢房 竹阿 丈芝 是物 儿董 燕村 五明 乙二 嵐雪 蓼太 貞交

秋のこれるを思ひたり 夢心

こちく向に三時ハあー秋のこれ  
 老翁よおをくそり秋の夕  
 翁を此路くつふくや秋の夕  
 玉おして尺了のくはあまの夕  
 尺をくよあま尺を秋の夕  
 ちをきさい何れ山を色ー秋のこれ  
 魚をりて笠を忘れは秋の夕  
 刀帯もを掃く人やあまの夕  
 衣路の浦ま人あー何きれく色  
 入おをつくち小林のくきく色  
 雁路 木羽 拾翠 竹富 水鶏 班石 燕村 蓼太 貞交



秋のふれ石のふれは  
道同は一里とあまの書  
遠きふれにふれ下ふれは  
秋のふれ女舟のほふれは  
何れもふれはふれ林のふれ  
又ふれはふれ松のふれは  
門のふれはふれ角かあまのふれ  
道同のふれはふれ林のふれ  
ふれはふれ同のふれはふれ  
秋のふれ死ふれはふれ女舟  
何れもふれはふれ林のふれ

嵐雪  
蓼太  
魯洲  
氷花  
月巢  
叶月  
秋良  
蓼主  
天社庵  
象松  
故班象

秋のふれ松のふれは  
あまのふれはふれ松のふれは  
神のふれはふれ松のふれは  
道同のふれはふれ松のふれは  
報急けふれはふれ松のふれは  
秋のふれはふれ松のふれは  
行旅のふれはふれ松のふれは  
宗陽のふれはふれ松のふれは  
林のふれはふれ松のふれは

天府  
月彦  
眠石  
月窓  
婦景  
故六  
普成  
信支  
管雅  
蓼太



行秋

申く秋や連とまいたおとすも  
り秋は若くも糸にほりし  
り秋七も一をとおしたはる雲  
ゆかぬや水田ほりて山の月  
り秋や人子若く此おしとち  
り秋や雲のほり乃菜大根  
り秋にみくもあつは養椒  
ゆか秋や雲しと通す村の白ひ  
船指り秋をりとと上川  
秋野むねまき若くあめ懸るの雲  
雲のあつと秋のりあつる南

吏登  
不騫

吐月  
竹條  
歌白  
富屋  
桃壺  
南羅  
夜兔  
訂兩  
翠兒

九月盡

と秋よて川を人々暮の秋  
ふそや秋末の水は秋をゆく  
碓くは袋屋へ秋のりあつ  
ゆ縁せし川風を九月を  
ゆか航のひとちと九月を  
夕ぐれをばきて九月晦日ち  
何処ふんを九月三十日ち  
油打のほりきとあつ九月末  
をちやうにあつる都の九月を

枝直  
素迪  
乙兒  
連丈  
桃祖  
木羽  
素迪  
大河  
完来



冬之部標目

十月

初冬

時雨

口切

吹

石

清

寒

細

十

冬日

巨

袋

山

涉

枯

河

後

水

去

火

豆

達

冬

冬

夜

頭

大

表

火

小

十

花

冬

散

冬

七

表

火

小

十

花

冬

散

冬

七



冬月 十 神每月 十 冬田 枯芦 枯柳

干菜 紙衣 納豆 六

十一月

霜 冬至 五 菜喰 曆賣 十 鷓鴣

空梅 暖鳥 水仙 鷹狩 九 初足也

鍊 菊花 冬隠 三 冬木立 冬川

空垢離 粉冬 髮玉 冰板 氷

雪 北 霰霰 神乐 北 津鼓 北 牡蠣

吹 北 十二月 臘八 佛名

空茶 北 寒声 北 空念仏 臘八 師走

細豆泥 衣拂 北 年市 衣配 年忘

餅つき 北 初年 年寄 大晦日 終年 北

固足 和布刈 宝瓶 年尾温交

雜部



此段句類取承

十月

時雨

のつげよ日の暮るるは時雨の  
極よき松の志はくや初しれ  
雲系をくふ葉に天をさすは  
又まゝおのれ由し何りか  
夕暮る子別しはきくは時雨  
二やや北也しはれ竹乃月

吏登  
藜多太  
吐月  
乙児  
沙羅  
日守



いふ一の時もえさうも松  
時を来り又志れり夕の那  
まらくし富さを傳ふ如く由  
是よりあそぶ所居に甘神りれ  
隙をめて松をたぬぬ時より  
たつとく淋しきせりしれれ  
春豆のあひまひし時をわ那  
即ちあく時をわ那すれ山に  
皇鷹ききき漏るし時をわ那  
色も香も志れ志れはるし  
たつて傳ふ時をわ那の入り日

宇平  
完来  
大江丸  
午心  
仙菓  
雨老  
寥松  
菊盤  
蓼大  
班象  
蒞籃

小舟の家のあつくと時をわ那  
傘の下一日の漏りしれり  
夕神して園をわ那し時をわ那  
即ちあく時をわ那すれ山に  
斬りぬり人おちし夕時をわ那  
松をわ那志れしれりしれり  
やう本れしれりしれりしれり  
お鬼やいつくしれりしれりしれり  
是まらくし富さを傳ふ如く由  
小舟あつ時をわ那すれ山に  
時をわ那すれ山に

春州  
波光  
連夫  
也  
逸賀  
文鱗  
六窓  
文交  
吐月  
銀身  
成義



西山をぬきかへし降る時雨は 川上氏 不白  
 阿のきし いまぬ老をこつ時鳥 月巢  
 波もたもきこるはしとくれは 眉山  
 何人の黒白輝たそおねしとれ 蓼太  
 神のまゝ古休ちかゝつ時鳥のま 蚊牛  
 秋のまゝ向かきてしとれはし 護物  
 あゝ海や時鳥て流る波しとら 阿良 王牙  
 鶯もたもきこるはしとくれは 蓬佐  
 しとれ中びらとみ成てまゝ。時鳥 素迪  
 火をけつ心をあやまつとれ 四明  
 一とれ中びらとみ成てまゝ。時鳥 カサ 射集

冬日

秋のまのまゝとらとら知しとれ 菊雅  
 しとれ中びらとみ成てまゝ。時鳥 柳如  
 けをたきつ阿のきとらとれはし 葉太  
 冬つりや阿のきとらとれはし 史記  
 文とれはしとれはしとれはし 夕景  
 冬つりや阿のきとらとれはし 斗南  
 冬つりや阿のきとらとれはし 柳如景  
 冬つりや阿のきとらとれはし 菅雅  
 冬つりや阿のきとらとれはし 松堂  
 冬つりや阿のきとらとれはし 源守  
 冬つりや阿のきとらとれはし 菱鏡



玄猪

第二種小萩、右の玄の子ハ  
以上の是く〜と云ふ、其れ等ハ

吐月  
全

麦苗

前より其の苗の時也、其れ等ハ  
其れ等ハ其れ等ハ其れ等ハ

其れ等

口切

口切也、其の何れ〜と云ふ、其れ等ハ  
其れ等ハ其れ等ハ其れ等ハ

吐月

口切也、其の何れ〜と云ふ、其れ等ハ  
其れ等ハ其れ等ハ其れ等ハ

其れ等

口切

口切也、其の何れ〜と云ふ、其れ等ハ  
其れ等ハ其れ等ハ其れ等ハ

其れ等

口切

口切也、其の何れ〜と云ふ、其れ等ハ  
其れ等ハ其れ等ハ其れ等ハ

其れ等

巨楯

大楯

巨楯也、其の何れ〜と云ふ、其れ等ハ  
其れ等ハ其れ等ハ其れ等ハ

吐月

巨楯也、其の何れ〜と云ふ、其れ等ハ  
其れ等ハ其れ等ハ其れ等ハ

其れ等

巨楯也、其の何れ〜と云ふ、其れ等ハ  
其れ等ハ其れ等ハ其れ等ハ

吐月

巨楯也、其の何れ〜と云ふ、其れ等ハ  
其れ等ハ其れ等ハ其れ等ハ

大楯

巨楯也、其の何れ〜と云ふ、其れ等ハ  
其れ等ハ其れ等ハ其れ等ハ

其れ等

巨楯也、其の何れ〜と云ふ、其れ等ハ  
其れ等ハ其れ等ハ其れ等ハ

故

巨楯也、其の何れ〜と云ふ、其れ等ハ  
其れ等ハ其れ等ハ其れ等ハ

其れ等

巨楯也、其の何れ〜と云ふ、其れ等ハ  
其れ等ハ其れ等ハ其れ等ハ

其れ等

巨楯也、其の何れ〜と云ふ、其れ等ハ  
其れ等ハ其れ等ハ其れ等ハ

其れ等







埋火

居 賊 走 へ 炭 土 ぬ へ 大 津 川  
新 毎 子 朝 日 一 日 大 津 川  
く つ ぐ 大 七 味 子 心 の 古 友 古  
埋 火 七 味 身 だ つ ぬ つ 一 畏  
く つ ぐ 大 七 味 子 心 の 古 友 古  
埋 火 七 味 身 だ つ ぬ つ 一 畏  
く つ ぐ 大 七 味 子 心 の 古 友 古  
埋 火 七 味 身 だ つ ぬ つ 一 畏

月 方  
金 危  
改 明 象  
百 里  
阿  
人 左  
葉 六  
吐 月  
舞 牛  
唐 牛  
木 奴

炭

炭 土 ぬ へ 大 津 川  
新 毎 子 朝 日 一 日 大 津 川  
く つ ぐ 大 七 味 子 心 の 古 友 古  
埋 火 七 味 身 だ つ ぬ つ 一 畏  
く つ ぐ 大 七 味 子 心 の 古 友 古  
埋 火 七 味 身 だ つ ぬ つ 一 畏

完 末  
巴 人  
宜 麦  
年 心  
新 参 松  
六 之 来  
差 特  
炭 土 ぬ  
桑 太  
人  
風 若

布圍

合衣

炭 土 ぬ へ 大 津 川  
新 毎 子 朝 日 一 日 大 津 川  
く つ ぐ 大 七 味 子 心 の 古 友 古  
埋 火 七 味 身 だ つ ぬ つ 一 畏  
く つ ぐ 大 七 味 子 心 の 古 友 古  
埋 火 七 味 身 だ つ ぬ つ 一 畏

完 末  
巴 人  
宜 麦  
年 心  
新 参 松  
六 之 来  
差 特  
炭 土 ぬ  
桑 太  
人  
風 若



春まけとやふものゝ紙金  
花をよみけりて新く念ふと南  
我子易かしく恨まじと望むとの  
なとあてて心せしるゝやふは  
くちあてておぼろしく紙金  
と実おぼろしく望むとん  
古き徳のゆかりに望むとぬ  
山はかき主乃望むとをこの所  
風とく浦の官屋の小まを  
神んとく人かきおぼろしく  
袖いとく人かきおぼろしく

足徳  
小春

羨魚  
文  
素  
社  
葉  
那  
晴  
日  
霜  
葩  
一  
徳  
吐  
月  
年  
心  
月  
志  
太  
葉  
太  
梅  
仙  
出  
月

十

有明く月も小春子遊日  
梅をハ夕日此多しぬ小春  
一日星と日障て小春の  
枝芽や鳥けなるとか  
小春やかりとあつた春子  
極本心をかまへ口苦く小春  
りんとあつた春の少は  
淋しき眼のりんとあつた  
枇杷のあかき葉をよみ男  
つまなく山菜花をよみ

石菖花  
枇杷花  
山菜花

石菖花  
枇杷花  
山菜花







落母

曲... 吐... 巴... 遙... 吏... 藜... 也... 兩... 管... 城... 子... 真... 了...

歸老

宜... 藜... 太... 魚... 班... 象... 左... 人... 挑... 加... 吐... 完... 來... 無... 松...







学枯や菘子即しき盲る  
 其風  
 人乃禁く火と息く一枯れ系  
 燻梁  
 河うらまき日の何より枯れ系  
 秋杵  
 冬枯や風をさる峰の月  
 仙菓  
 着を掃枯の里火つる  
 一貫  
 枯くて世を夕暮るあうり星  
 月巢  
 三日月れ反うた枯れ系  
 吐月  
 牛の尾乃却と兼ぬ枯れ系  
 蓼々太  
 念ふあふる世けく枯れ系  
 寧々松  
 まくくと忘るあう枯のほ  
 周幸  
 月影の世をさる枯れ系  
 志碩

冬野

淋しきに落進る枯れ系  
 松成  
 人けく足付て以やれ系  
 雷堂  
 一里足一而子連る枯れ系  
 午心  
 天竺の音世中枯れ系  
 まる長  
 心やる時系抱ひら枯れ系  
 嵐杵  
 日の何る傘たむ枯れ系  
 篤甫  
 淋しきの果を枯れ系  
 可貞  
 百姓の世替てきた枯れ系  
 河翠  
 丹頂の人参掃を枯れ系  
 祇州  
 牛の子枯れ系あてぬ枯れ系  
 冬枯れ系あてぬ枯れ系  
 吏登



冬枯

お庭の孔雀もあれしを此の  
伐たせしあま木踏のそと  
冬枯也古跡も何つる田之反  
ふも枯也日れ新きも橋 枯  
冬枯也贅女の心もつれ山  
鴈乃りつるも空を何し  
天の川も何れもまきまき  
り輝く新割の都の空も  
空もおや人の情も何れ  
空ありし空も何れも山の後

少夜 寮松 青る 轍之 満良 吏登 月守 班象 玉水 乙二 蘭香

寒

楳

類

楳も孫て又れそちの羅が  
楳の夫也君在ぬえ 山 刀  
埋本も度。おのの楳夫也  
我門とこのあつて楳のり  
新明也海もつる中。楳の灰  
十月を後明月とこれおん  
多老福者中入りりゆとけ  
新もつて楳のあい日ハ風はうり  
ゆけやうあつてまの友斗り  
後けや人まらるるあつての上

家松 岩水 夢助 左株 鳥兆 月巢 大江丸 吐月 年心 祖東



直真引

縁之を佛もふもあはくは  
あゝまゝお真の大はまはひ  
三井の傍字て下りお真引  
をたたく門の何れもあはく  
帆仗のよおまちり也進屋  
かく深々何ハきいさよち  
あたるハ風は中こちりもち  
世のうのたのれくや細代  
守まきくみ人いひこ細代  
世の中は子は佳く人死細代

大江丸  
氷花  
定来  
夢多太  
春江  
吐月  
夢多太  
大江丸  
定来

細代守

共母来漬

何さつひ  
頭中

中くは啞がにじぬるも  
世はしとあつては細代守  
漏れつる思付をあつて何れも  
さあとのよせて老えん細代守  
浅月みまをさる居也何れ守  
あゝあ本やちりし朽もも  
君もよもあまのいも草の梅  
草はまはは明もあまのまもも  
座の尻のまもつてはくもはは  
あはの歯は遠通る男も那  
よあはく老のまもつてはくも

老丸  
情車  
左席  
不知  
吐月  
案松  
嵐香  
何れ  
年心  
夢多太  
あはく



冬籠

似憐のふふとれてあやうき  
改中野の川にわづらふとあはれ  
およきくと改作のたつて海へ  
あぬ人のりふと目なつてひや  
おとひよきて月見よあはれ  
大いけれとひよつとけよあはれ  
羽さすのやとあはれよあはれ  
法櫃のこころをこころり  
燈のこころをこころり  
冬籠のこころをこころり

蓼多太  
蕪村  
對賀  
金井  
蓼太  
六窓  
吐月  
完未  
象多松  
青牛  
月泉

北阜のふふとれてあやうき  
改中野の川にわづらふとあはれ  
およきくと改作のたつて海へ  
あぬ人のりふと目なつてひや  
おとひよきて月見よあはれ  
大いけれとひよつとけよあはれ  
羽さすのやとあはれよあはれ  
法櫃のこころをこころり  
燈のこころをこころり  
冬籠のこころをこころり

北阜  
商成  
之子矣  
梧泉  
雪珊  
普成  
其夕  
月居  
秋杵  
師心  
文足







海風

只今可憐て去川に浮舟き  
山眠りあそぶ遊子汀う南  
ふもむれ空を引きて松小  
鴨もや若くおろけ羅つ二  
若くあはれてあはれく鴨  
鴨もあはれ四壁を何れ風の砂  
已う身を松の鴨も浮舟き  
をいさよよおろけ羅つ二  
犯す尖きか吹くもつれ水の月  
をいさよよおろけ羅つ二

木羽  
月巢  
吐月  
午心  
松欽  
菅雅  
柴立  
大江丸  
芳奴  
吐月  
嵐雪

大根引

月をねむ後ノ服も雪も海風も  
砂の中をまきく遊子あり海風も  
急きよれまきくあはれくあまこト  
浮舟あり海風もあまこト  
うたふれ泡やまよとに接しん  
大根引しあはれまきくあまこト

沙羅  
吐月  
因是  
完来  
月巢  
我友

土蒸

冬月

妻人のあはれくあはれくあまこト  
冬月やかきくあまこト卵  
冬月搦の本系はあまこト  
あまこトあまこトあまこト

寥松  
大江丸  
普成  
寥松



冬は月人をたおれてはねが  
ふ世の月山本くき木の君  
を月口くしとわふおまの経  
こころさて水流るるまは月  
徳よりしてお誓しん冬月  
信をさかしてまは月おま  
み月晴る鳥の飛ねの那  
おてんねた我し思し冬月  
冬のおく月のおまはあひ  
天孫の御存候せ冬月

吳雪 鳥山 蚊牛 臨泉 沙飛 了事 嘘長 良娥 蓼阿 之道 深松

帆柱のおまはあひまは月  
夏人お笑らぬ病せ冬月  
冬さしてん冬をさく冬月  
ひらいてん冬をさく冬月  
冬月みまはあひまは月  
ひらいてん冬をさく冬月  
ひらいてん冬をさく冬月  
ひらいてん冬をさく冬月  
ひらいてん冬をさく冬月  
ひらいてん冬をさく冬月

春朝 鯉半 雷堂 三鶴 雁赤 糸丸 梅堂 一鷺 曉長

十二月

十月のさあしんあしん

完来



久々田

木の枝よき葉を枯らして冬田うき  
臨みうけし極も見えて冬田うき

吐月 五雄

枯芦

孔芦やりをかきうき余りやう  
枯芦の心は死ななうきうき鳥

吐月 素夕

枯柳

枯くして月を柳の浅瀬うき  
糸よ我糸よ流らんうき柳

蓼太 器文

干菜

干菜の心透てきし 枯柳  
たふしうき死糸も流る干菜心

野叟 李蹊

伏衣

伏衣の心透てきし 枯柳

蓼太

納豆

今世を暮らすも死ななうき  
素も信ずる心ありて紙あり  
手厚紙紙をきておし紙あり  
うき拂し紙や紙ありうき  
子よんせぬ葉の穂原よ紙あり  
納豆やうてハ信ずるなうき  
細葉も葉あつてうき里乃家  
流水の月よき何し納豆心

鬼守 吐月 班象 素門 完来 午心 寥松 三思

霜

霜の風やうきうき美味倍

嵐雪

十一月















水仙花... 普成

水仙花... 配摩

水仙花... 月巢

水仙花... 吐月

水仙花... 花笑

水仙花... 蓼太

水仙花... 大江丸

水仙花... 魚紋

水仙花... 水鷄

水仙花... 沙羅

水仙花... 蓼太

水仙花... 蓼太

鷹鳥狩

秋

茶

顔見世



鯨

鯨の世やいとまの世もあ  
 初と世やまの世もあ 送る花  
 顔も世やいとまの世もあ  
 うるみせやまの世もあ 竹の世もあ  
 蒼蒼と世もあ 一も鯨もあ  
 車揚了世もあ 一も鯨もあ  
 初と世やいとまの世もあ  
 葉の花や鯨の世もあ 竹の世もあ  
 葉の世もあ 一畝の世もあ 竹の世もあ  
 葉の花や日と鯨の世もあ 竹の世もあ

山市

一鷺

其時雨

吐月

月守

海曉

笑山

完来

豪山

了浦

茶花

冬堀

冬木立

冬川

寒垢離

雑冬

影友置

冬堀  
 冬木立  
 冬川  
 寒垢離  
 雑冬  
 影友置

寒松

社月

宦衆

維迪

豪山

午心

班象

氷花

丸丸

葵太

吐月







ありやちよふ影をくさる松  
つづけぬるまきよけれをん松  
以月

山越くしてとれたるひやな松  
おろきまき五人かろやま松  
勉まきまき松つれまき松  
降まきまき松つれまき松  
まきまきまきまきまき松  
まきまきまきまきまき松  
月まきまきまきまき松  
まきまきまきまきまき松

い糸松影やまきまき松  
門のまきまきまき松  
仮まきまきまきまき松  
まきまきまきまきまき松  
まきまきまきまきまき松  
まきまきまきまきまき松  
まきまきまきまきまき松  
まきまきまきまきまき松  
まきまきまきまきまき松  
まきまきまきまきまき松

大江地  
松影  
松影  
松影  
松影  
松影  
松影  
松影  
松影  
松影







霰雲

を車川の流を尻に千里の大  
我は此處に坐して雲の影を  
ききおれとて雲の影を  
山風や雲の影を  
月も亦流るる思ふは  
さうさうの影を  
かろふ影の影を  
正しく代へては  
西よれと行るる里  
鳥のや橋を  
流るるを

渡橋  
風雲  
雲を  
大音  
小音  
柳影  
風雲  
産鳥  
秋柳  
文足

神樂

神楽女世子ゆりおの影を

午心

鉢扣

今か一はより一鉢扣き  
さすまのよ例の影の鉢扣  
おふとらおの影の鉢扣  
橋をてて影を  
おの影の影を  
飛込ておの影の影を  
傘かおの影の影を  
鉢扣を  
横を

嵐を  
夷を  
薬を  
松を  
乙を  
司を  
吐を  
砂を  
雲を



石花

下手の歌も上手の歌もいふ神打  
もあつた歌部多しとぞねり  
身を狩りよ下詰たてふ此神打  
多まひく石花かーじいふり  
似蝶の清梅流し後折乃橋

百續  
年ん  
水花  
鬼守  
心

橋に碓のつめを七糸命のま

出  
胸

十二月

寒菊

雪をきく水の音を水の音水

葉  
土

雪をきく水の音を水の音水

女  
花  
流

寒念佛

寒念佛

雪をきく水の音を水の音水  
雪をきく水の音を水の音水  
雪をきく水の音を水の音水  
雪をきく水の音を水の音水  
雪をきく水の音を水の音水

白麻  
吐月  
大育  
蓼太  
玉后  
雪珊

臘八

雪をきく水の音を水の音水  
雪をきく水の音を水の音水  
雪をきく水の音を水の音水  
雪をきく水の音を水の音水  
雪をきく水の音を水の音水

子交  
完未  
眠江  
秋色



俳名

穠ハヤおぼてふれを思ふ  
 臘ハヤ朔而を味吟の才一我  
 佛名セおつぬるも死の奴  
 仏名セ嘆かせハ花を争  
 仏名セ神の私も五玄の縁  
 仏名セふらてすや雲の影  
 椽久々椽をせしとらふまふ  
 高き名や人に呆えりおまふ  
 天子はかゝるまふし時春  
 心しししをばしし神御や  
 牛つふん子まらぬせいの春

自林 夫  
 海心  
 文足  
 秋梓  
 遠琴  
 葉太  
 以月  
 不寄  
 葉太

節季候

年丙之春

追難

年新

師走

有明やまの月  
 春の月  
 厄拂 注ハ限なき月おと素  
 弟ふやおまらぬ松のそ  
 流くは松くまおれよお松  
 陰を揮てまらぬ木松  
 山伏のまらぬあまの松  
 下後におほくおまらぬ  
 雪のまらぬおまらぬ  
 松風お世よまらぬおまらぬ  
 急り流くまらぬおまらぬ

吐月  
 沙羅  
 葉太  
 東鳥  
 乞未  
 都英  
 嵐雪  
 寥松  
 方壺  
 葉太  
 葉太



納豆配  
煤掃

月七日心痒又くう海光く柳  
詠色はを柳系ゆもさ南  
浄破利の氷よりう海光く  
空の月心傘あう下ハ海光く系  
可き念に有川合以師走く  
相松の上時やあれを海光く  
大系を音の掃り海光く  
吹つけく尺中源光の月相く  
納豆配系多川と掃り系  
す掃り竹を伐見十三日  
き掃り依尺の系たせり

繁松  
月古  
葉太  
公目  
故班系  
馬光  
海光  
百妻  
大江村  
海光  
三鶴

年の市

夜配

き掃りにつて系る川和心  
様のりや部掃り系を海光  
たつく系人達よりすの門  
き掃り心か系より一尺系  
煤掃り七カあれ一山海  
掃りたう海光く一の市  
と一の多々系おを掃り隅川  
ゆく系一掃り心系教心掃り  
今年何う哉を系あり心死  
花より掃り系心系死り系  
系掃りあり一系心系くたり

心  
吐月  
尚美  
青牛  
故班象  
玉宇



年志

傷七世より世々此の如く  
死にぬぬより生くるに  
おまに汲年忘井の後家  
二ねと六子小母ひく  
みより子孫孫をい  
おまに汲年忘井の後家  
年志はもれをい  
孫ぬに孫は六子  
おまに汲年忘井の後家  
おまに汲年忘井の後家

吐月  
分年  
蓼太  
月守  
夏炊  
班象  
宜麦  
吐月  
信中  
柳莊  
不書  
宜交

餅搗

餅つきは多かりて二月の陸  
おまに汲年忘井の後家

吐月  
升古

行年

りより世々此の如く  
孫ぬに孫は六子  
おまに汲年忘井の後家  
おまに汲年忘井の後家

普城  
蓼太  
午心  
物我

年の暮

猿猴の年ふまをい  
おまに汲年忘井の後家  
おまに汲年忘井の後家

嵐雪  
史豊  
完未



は豆袋のついでに... 年々...  
ついでに... 年々...  
小娘の梅く... 年々...  
西行のついでに... 年々...  
細の葉は... 年々...  
好む... 年々...  
余の... 年々...

蓼大  
吐月  
寥松  
其桂  
蓮佐  
普成  
完来

大晦日

み... 子... 梅... 大世日  
今... 梅... 大世日  
... 大世日

午心  
任栢  
祇風

終年

終年や人を... 降 不賽

岡見

岡... 妹... 小家の門  
我... 小家の門  
嵐雪

和布刈

宝舩

二艘... 舟の代... 梅...  
舟の代... 舟の代...  
梅... 舟の代...  
... 舟の代...

吐月  
完来  
蓼太  
午心



水餅の毒中なるりてこの病  
方かきくもさる物とのりり  
おきまきとせむるこもふ事なり

魚二  
魚汶  
午心

梅月也門にづりく在御了

寥松

さる封き。年姑小利の奈

了輔

風流とや耐とりの名あり奈

蓼太

同具

同具 鞍部

酒も亦も意き川たる念佛ハ

沙羅

晴也何よを此名ふ人たる物

寥松

菰句類聚

上野をささきまする四十町をうめ川

とく尾久といふ里あり其川乃

流まぢふてのりまいと清く白魚

とく蒲火を志すぬ黒汁を足る

心ちすさむ本傳ふるも昔工心も蘇

うつりたるあを色えもいそむをを

まらふるもあを地なるも



この冬もやまこふさしい花あはる情の  
筆とらめ耕をるとまうーうさあうう  
朱氏の老花は縁をあるあもあ  
初を言はるう酒をささん竹はれ  
人の心はたをうらあまおさあま  
おのう蔵かしてはめ、新葉志ふの  
ちりともくしるるはあるあ  
深川は携り申きてあ星は剛い

求ふ小夜まきいひあはるうら  
いうてあいまむまきねてあはる  
采るもろしあはるうらあ星は剛い  
を初申てあ星は剛い  
人をもろしあはるうらあ星は剛い  
あ星は剛いあはるうらあ星は剛い  
いしあはるうらあ星は剛い  
あ星は剛いあはるうらあ星は剛い



未くつをせよふしつし  
文化下印を林七月の半  
つるの

雪中菴の元来



明治廿一年九月求版

編輯人

故人

青願彦了稿

新潟縣平民

著行人

目黒十郎

東京

古志郡長岡表四ノ所十九番地

發兌所

全支店

京橋區南傳馬町二丁目五番地



